そして、太宰府時代の道真を探る手立ての一助となれることを秘かに願う。一方でまたこの書が一地方で取り組んでいる地道な地域住民と高等教育機関との連携の一報告書となっていることを願う。

平成二十年　九月　二十七日

焼山　廣志　記

［あとがき付記］

前述のあとがきの後、丸七年の月日が経った。その間、大牟田・荒尾市の有志による「道真梅の会」は会員のお一人が死去されるという悲しく、辛い事件を乗り越えて現在も存続している。そして月一回の講読会もほぼ欠かすことなく持続出来ている。その間平成二十四年度に新たに会員との学習成果をまとめた『「哭奥州藤使君」他一編（『菅家後集』）全注釈（二）』を二冊目の刊行物として公にする事が出来る幸運に恵まれた。

今回、焼山の今までの研究成果を集大成すべく拙著の上梓を企画する段階でこの「道真梅の会」の会員とまとめあげた『「敍意一百韻」（『菅家後集』）全注釈』をこの著に是非収録したく原稿全文を改めて見直すことにした。約半年をかけて現在の会員四名で定期的に集まり、原稿を一頁ずつ見直す地道な作業を行った。平成二十年に公にした拙著の語句の誤りや論の不自然なところを可能な限り改稿する方針で臨んだ。

結果としてこの初版に多くの不備があることが判明し「注釈」という一字一句をないがしろに出来ない慎重さ